

小説

は せ が わ
お さ む
長谷川 修

下関市
(1926～1979)



【著作】

『ふうてん学生の孤独』（昭和44・新潮社）
『まぼろしの風景画』（昭和47・新潮社）
『住吉詣で』（昭和55・六興出版）ほか

大江健三郎が、『東大新聞』に小説を書いて、華やかに文学界に登場した頃、踵を接するように長谷川修は『東大新聞』に投稿、第八回五月祭賞の佳作に入選する。このことが本意であった修は、同じ作品を『新潮』の同人雑誌賞に応募する。こうして「キリストの足」は『新潮』十二月号に掲載され、文壇登場を果たした。修には、いわゆる文学青年臭はなかった。その履歴も理科系である。しかも美術への深い関心があり、その絵画的発想が、自然主義を嫌い、アブストラクトやシュール感覚を小説世界に構築している。六十年代から七十年代にかけて、安部公房、大江健三郎、倉橋由美子の衝撃的な活躍を見据えながら、修は、絵画ではクレイ、文学ではベケットなどのシュール・アバンギャルドの秘法を分析、まったく異空間の文学的営為に挑んだ。

「真赤な兎」「孤島の生活」「哲学者の商法」、少し間をおいたが「まぼろしの風景画」も芥川賞候補になった。印象としてはほとんど毎年連続して芥川賞候補にノミネートされ、ゆるぎない筆勢で話題作を次々と発表している。とくに「ヘリウム氏」「ふうてん学生の孤独」「第七之鍵」は、その手法の斬新さ、思いがけぬ着想の離れ業に、孤高の長谷川文学を発色させた。

実に円熟期の惜しまれる急死だった。しかし、土着性を嫌った長谷川ワールドだが、晩年期に郷土周辺にまつわる古代史に踏み込み、独自の視点でロマンを展開。作家と風土の連環を刻印した。

なお、平成二年（一九九〇）、修の唯一の文学親友だった長崎・諫早在住の芥川賞作家野呂邦暢との間に交わされた「往復書簡」が陸封魚の会・編により出版された。当時、地方の一画に在住しつつ、文学世界を見つめて創作に励んだ苦闘の書簡は、その孤高さにおいて、また不条理さにおいて、読む者の胸を打つ。

「お互い地方で書いていると苦しいことだらけですが、とにかく頑張りましょう。東京の連中を負かしてみても始まりません。私たちは結局、自分に打ち勝つということしかないように思います。」

（文・武部忠夫）



（華書房 刊）



愛蔵品

——ある晩、魘^うなされるほどの夢を見た。それは私が勝手放題に喋った妄言蜚語の類いの責任を問われて、閻魔王のような鬼から、あらゆる刑罰で責め立てられている夢だったが、目を覚ましたあと、さすがに全身脂汗をかいていたものの、その恐ろしさの大半はもうあらし忘れていて、ただ恐ろしい夢だったという記憶が残るだけだった。だがその夢の中でひとつだけ、前後の状況はさっぱり思い出せないが、黒い海の中に赤い鳥居が建っている光景が出て来て、そこだけ妙にはっきり憶えているのだ。黒い海といっても、そここそ漆器の墨を流したような真黒な海で、勿論空も真黒であり、そういう暗闇の世界にひろがる海の上に、ただ一つ、目も鮮やかな真赤な鳥居が建っている。そのほかには何一つ見えないのだが、その鮮烈な朱色は今でもはつきり記憶に残り、それは、深海の底から跳ね出た真赤な海老^{えび}の色、あるいは暗黒世界の底で体腔を開いたり閉じたりさせている真赤ないそぎんちやくを想わせたりする。

一体、夢の中の赤い鳥居には、どんな意味があるのだろうか？真黒い海や暗黒世界は、かりに私の脳髓の内部にいた穴の世界だと解しても、その真赤な鳥居は私の潜在意識の中で、どのような願望を表徴しているのだろうか。

私は戯れに、夜、真暗な中で鏡の前に立ち、不意に電灯を点滅させて、一瞬鏡に映る私の額の部分に、赤い鳥居の残像がかすかに浮かんでいるのではないか、などと試してみるし、また、街など歩いていて、何となく怪訝そうな表情でこちらを見ている人がいれば、私はすぐさまその人に声をかけ、「あなたはいま、私の額の上に何を見ました？真赤な鳥居のマーク、ね、そうでしょう？……」と、念を押してみたくなる。

（『住吉詣で』（六興出版）より抜粋）

長谷川 修 年譜

（提供・長谷川郁美）

大正15（一九二六）年

昭和4（一九二九）年

昭和6（一九三二）年

昭和7（一九三三）年

昭和13（一九三八）年

昭和18（一九四三）年

昭和20（一九四五）年

昭和23（一九四八）年

昭和25（一九五〇）年

昭和32（一九五七）年

昭和34（一九五九）年

昭和35（一九六〇）年

昭和37（一九六二）年

昭和38（一九六三）年

昭和39（一九六四）年

昭和40（一九六五）年

昭和41（一九六六）年

昭和43（一九六八）年

昭和47（一九七二）年

昭和48（一九七三）年

昭和50（一九七五）年

昭和52（一九七七年）

昭和53（一九七八）年

昭和54（一九七九年）

昭和55（一九八〇）年

平成2（一九九〇）年

三歳

五歳

六歳

二歳

一七歳

二二歳

二四歳

三一歳

三三歳

三四歳

三六歳

三七歳

三八歳

三九歳

四〇歳

四二歳

四六歳

四七歳

四七歳

四九歳

五一歳

五二歳

五三歳

3月8日、下関市に生まれる。

実父・安光年治死去。

養父・長谷川順太郎肺結核で死去。

下関市立桜山尋常小学校入学。

山口県立下関中学（現・下関西高）入学。

旧制福岡高校（理科甲類）入学。

京都大学工学部化学燃料科入学。

「松竹」助監督試験を受け合格するが、親族の反対で断念。大学卒業後、宇部化成に入社。喀血、手術。二年間の療養生活をおくる。

小倉常盤高校の美術教師となる。翌年から化学も担当。

堀尾玲子と結婚。

長女・郁美誕生。

再び療養生活。

「宿恋」を堀尾修三の名で『文芸首都』に発表。

「キリストの足」が東大新聞第8回五月祭賞の佳作。同作品が「新潮」12月号に掲載される。

「僕の中のヨセフ」「真赤な兎」を『新潮』に発表。下関水産大学で教鞭を執り始める。

「真赤な兎」が第52回芥川賞候補となる。

「孤島の生活」が第54回芥川賞候補となる。

「哲学者の商法」が第55回芥川賞候補となる。

実母シナ死去。

執筆旺盛、多彩。古代史をユニークな視点で照射。

「まぼろしの風景画」第66回芥川賞候補。

「私の古代史」を『芸術新潮』に連載。

この頃より多彩な雑誌・文学誌に執筆。『国文学』『歴史と人物』『九州人』『新潮』『群像』『人文書院』『潮』『歴史と旅』『歴史読本』など。旺盛な執筆活動続く。

六興出版より『幻の草薙剣と楊貴妃伝説』刊行。

六興出版より『近江志賀』刊行。

体調崩し、9月入院。

5月1日、永眠。

六興出版より『住吉詣で』刊行。

葦書房より『長谷川修・野呂邦暢往復書簡集』刊行。